日本の名湯(七)　湯の峰温泉（和歌山県)―世界文化遺産に含まれる古湯

日本には現在、ユネスコ(UNESCO：国連教育科学文化機関)登録の世界遺産に含まれている温泉地が三箇所ある。その一つが和歌山県の湯の峰温泉で、2004 年に登録された世界文化遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の構成資産「熊野参詣道・中辺路」に含まれている。残る二箇所のうち、和歌山県の湯川温泉は同じく「紀伊山地の霊場と参詣道」の構成資産「熊野参詣道・大辺路」に含まれており、もう一つは 2007 年に登録された「石見銀山遺跡とその文化的景観」の構成資産「温泉津(ゆのつ)沖泊道」及び「「銀を積み出した港と港町」に含まれている島根県の温泉津温泉である。

紀伊山地とは、6 世紀の飛鳥時代から都があった近畿地方の南半分を占める紀伊半島を東西に横断する中央構造線より南側、太平洋岸まで広がる山地のこと。急峻な渓谷とうっそうとした杉木立の奥深い山地で知られる。中でも吉野山、高野山、大峰山といった山々は古くから山岳信仰の対象となり、山岳修験者の回峯、修行場となっていた。そして紀伊山地の南部地域(現在の和歌山県東南部と三重県南西部)が古来「熊野」と呼ばれてきた。

「紀伊山地の霊場」熊野本宮大社入口（以下断りない限り提供：石川）

湯の峰温泉は、世界文化遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の主要な構成資産で、熊野にある三つの信仰の霊場を総称した「熊野三山」(熊野那智大社、熊野新宮、熊野本宮)の中核となる最奥の熊野本宮に近く、参詣者が参詣前に心身を温泉で清める「湯垢離場」として重要な役割を担ってきた。「熊野三山」を巡って参詣する「熊野詣で」と呼ばれる聖地巡礼は、平安時代後期の 10 世紀頃からは都(京都)より 1 か月以上の日々をかけてはるば

る上皇(退位後出家した天皇)や女院(上皇后)、朝廷貴族らが度々参詣に訪れるようになって、いっそう盛んになった。

すでに《文化歴史》欄「日本の温泉の歴史と文化(二)」で紹介したように、その一人の右大臣藤原宗忠は 1109 年 11 月 1 日、熊野本宮に近い宿に着いた後、参詣前に身を清めるために湯の峰温泉の湯屋を訪れている。そのとき湯浴みしたのが、湯の谷川という小さな渓流脇の川床の窪みの岩底割れ目から 90℃前後の熱い源泉が湧き上がってくる天然湯壺「つぼ湯」であった。

藤原宗忠は湯浴みの感動を日記『中右記』に、「誠希有之事也、非神験者豈有如此事哉、浴此湯人萬病消除者」と記した。「つぼ湯」は今も健在で、予約による 30 分交替制で小さな湯屋を貸切入浴(大人入浴料 400 円)できる。約千年前に平安王朝貴族らも入った湯壺で入浴できるというのは、貴重な温泉体験となるだろう。もちろんとても熱い温泉が湯底から湧いてくるので、現在は湯壺の脇に取り付けた蛇口から水を注いで適温にして入れる。

平安貴族も入浴した天然湯壺「つぼ湯」(左)／「つぼ湯」の湯屋入口

世界遺産の温泉地と言っても、湯の峰温泉は山峡にたたずむ閑静で小さな温泉場だ。宿もみな小規模で、和風の木造旅館や民宿が 14 軒ほど。旅館や茶店などが渓流及び並行して走る道路沿いに並ぶ。派手な観光・娯楽施設もなく、にぎやかさもない代わり、長い年月を重ねた歴史の蓄積と温泉文化、そして何より極上の温泉が迎えてくれる。

老舗旅館（左）などが湯の谷川の渓流と道路沿いに並ぶ（右）

湯の谷川が泉源（湯元）地帯となっており、温泉は今もすべて川床岩盤の割れ目から自然湧出しているのが素晴らしい。泉温は最高 92℃あり、泉質は重曹硫化水素泉（含硫黄–ナトリウム–炭酸水素塩泉）で、硫黄など温泉成分の沈殿により浴槽の湯の色は変化する。「つぼ湯」のすぐ川下の川床には「湯筒」と呼ばれる四角く囲まれた小さな熱泉池があり、観光客が網をに包んで入れた野菜や卵がたちまち茹で上がる。

紀伊山地には（第四紀）火山は見られないのに、先に紹介した白浜温泉同様に湯の峰温泉からこれほど熱い温泉が湧出するのか、長く研究がなされてきた。高温泉湧出の機序はどうやら 1400 万年前のマグマ噴出でできた熊野酸性岩を通して湧出していること、太平洋プレートの沈み込みが関わっているようである。

熱泉池「湯筒」で卵を茹でる

湯の峰温泉の自然湧出源泉は地元財産区が共同管理しており、巨大な外部資本の参入・乱開発から守ってきた。今日の SDGs に適った伝統的な温泉資源管理が保たれている。

次に温泉地としての歴史と、湯の峰温泉にまつわる有名な物語を見よう。

湯の谷川に沿ったこじんまりした温泉街を世界遺産の構成資産「熊野参詣道」＝熊野古道「中辺路」が横切っている。「つぼ湯」の近くに、古くから参詣者のために道程の目安として建てられた熊野信仰の小さな神社「王子」社の一つ、「湯峯王子」が設けられている。参詣者はここで無事な参詣を祈願し、ときに休息した。

「つぼ湯」と「湯筒」、老舗旅館が並ぶ温泉街の中心に東光寺という天台宗の古刹がある。隣には共同浴場が建ち、まさに湯の峰温泉の温泉寺にあたる。東光寺の秘仏本尊(年に一度開帳)が、温泉成分が堆積して出来た噴泉塔が薬師仏の姿となって、胸にあたる部分から温泉が湧いていた高さ約 2.6mの「湯(ノ)胸薬師」である。温泉名はこの秘仏に由来する。

「湯胸薬師」が秘仏本尊の東光寺。隣りに共同浴場がある

古来の山岳信仰を基に、熊野本宮を筆頭とする熊野詣での広がりを受けて、神仏習合の熊野信仰は中世の時代になると「熊野聖(ひじり)」と呼ばれた修験者の活動、さらに熊野詣でを契機に悟りを開いた一遍上人が開祖となる時宗の「湯聖」らにより、中世の時代になると温泉信仰と結びつく。

熊野聖や時宗の湯聖らの活動を背景に、中世の時代に人気を呼んだのが、有名な説経本『をぐり』の物語だ。毒殺されて地獄に堕とされ「餓鬼」の姿となった主人公の小栗判官が、閻魔大王の「熊野本宮之湯の峰に連れて行け」との計らいにより、妻の照天姫や時宗の上人の助けで土車に乗せられて湯の峰温泉にたどり着き、温泉療養によって無事人間の姿に再生を果たす。湯の峰温泉は人を蘇らせる「再生の湯」と讃えられるのだ。

熊野参詣道「中辺路」の傍らに建つ一遍上人碑

「熊野」は日本語では「ゆうの」「ゆや＝湯屋」とも読める。何より「熊野本宮之湯」と呼ばれていく湯の峰温泉の威光をバックに、中世に箱根をはじめ全国の有力温泉地に温泉守護の「熊野(神)社」が勧進され、祀られていった。

さらに江戸時代に相撲番付に倣って各地で作成された温泉番付「諸国温泉功能鑑」では、全国の温泉地を格付する場の “土俵”を清め、采配を振るう立行司役を「熊野本宮之湯」、すなわち湯の峰温泉が担った。湯の峰温泉は歴史的にみて日本の“king of hot springs”なのである。

塩（左）／老舗旅館「あづまや」の内湯

平安貴族や上皇らが足繁く参詣に訪れた昔も今も、湯の峰温泉や熊野本宮への道のりは遠い。最寄りの鉄道駅（田辺駅・新宮駅）からもバスで約１時間半はかかってしまう。その奥深さが温泉への期待感をいよいよ増すことだろう。

事実、湯の峰温泉の手前にも川湯温泉という、その名のとおり川の中から 70℃以上の高温泉が湧く温泉地がある。やはり熊野酸性岩から自然湧出しており、夏場は熱すぎるので、冬場（11～２月）に川の流れの一部を堰止めして野天風呂をこしらえている。また、川原の砂石を自分で掘って即席野天風呂もできる。紀伊山地の、熊野の温泉の醍醐味を堪能してほしい。

川湯温泉の川を堰き止めた野天風呂（奥）と川原の手掘り風呂

【温泉地 DATA】

・所在地： 和歌山県田辺市

・アクセス： JR 紀勢本線新宮駅・田辺駅からバス 1 時間 10 分～40 分

・泉質：含硫黄−ナトリウム−炭酸水素塩・塩化物泉（硫化水素型）

・泉温／pH：最高 92℃／pH7.8

・源泉数／湧出量／湧出形態：13 本／毎分約 900 リットル／自然湧出

・宿泊・温泉入浴施設：宿 14 軒。共同浴場 2 箇所（「つぼ湯」は営業。共同浴場は改修工事中）

・照会先：熊野本宮観光協会 TEL0735-42-0735

本文　石川理夫